



5:12 さて、使徒たちの手により、多くのしるしと不思議が人々の間で行われた。皆は心一つにしてソロモンの回廊にいた。

5:13 ほかの人たちはだれもあえて彼らの仲間に加わろうとはしなかったが、民は彼らを尊敬していた。

5:14 そして、主を信じる者たちはますます増え、男も女も大勢になった。

5:15 そしてついには、病人を大通りへ運び出し、寝台や寝床の上に寝かせて、ペテロが通りかかるときには、せめてその影だけでも、病人のだれかにかかるようにするほどになった。

5:16 また、エルサレム付近の町々から大勢の人が、病人や、汚れた霊に苦しめられている人々を連れて集まって来た。その人々はみな癒やされた。

5:17 そこで、大祭司とその仲間たち、すなわちサドカイ派の者たちはみな、ねたみに燃えて立ち上がり、

5:18 使徒たちに手をかけて捕らえ、彼らを公の留置場に入れた。

5:19 ところが、夜、主の使いが牢の戸を開け、彼らを連れ出し、

5:20 「行って宮の中に立ち、人々にこのいのちのことばをすべて語りなさい」と言った。

5:21 彼らはこれを聞くと、夜明けごろ宮に入って教え始めた。一方、大祭司とその仲間たちは集まって、最高法院、すなわちイスラエルの子らの全長老会を召集し、使徒たちを引き出して来させるために、人を牢獄に遣わした。

5:22 ところが、下役たちが行ってみると、牢

の中に彼らはいなかった。それで引き返して、こう報告した。

5:23 「牢獄は完全に鍵がかかっていて、番人たちが戸口に立っていました。しかし、開けてみると、中にはだれもいませんでした。」

5:24 宮の守衛長や祭司長たちは、このことばを聞くと、いったいどうなることかと、使徒たちのことで当惑した。

5:25 そこへ、ある人がやって来て、「ご覧ください。あなたがたが牢に入れた者たちが、宮の中に立って人々を教えています」と告げた。

5:26 そこで、宮の守衛長は下役たちと一緒に出て行き、使徒たちを連れて来たが、手荒なことはしなかった。人々に石で打たれるのを恐れたのである。

2章では「好意を持たれた」とありますが、ここではさらに「尊敬」されていたことがわかります。クリスチャン全員がどのように見られているかが大切です。当然、見かけだけの問題ではなく、人柄です。救われてからの成長やきよめが大切です。それによって、宣教を進展させるか妨げるかが決まるのです。

それに主の恵みのわざが加わるとき教会は大きく前進します。すなわち宣教が進みます。ねたみに燃えた指導者たちがいたように、世の中には敵対する人もあるでしょうが、使命を持って生きる人は守られます。今も当時と同じ神様が働いておられるからです。ただし、自分が守られるために使命を果たすのではなく、使命のために守られるのです。

主に支えられ守られるたびに、「いのちのことばを、ことごとく語りなさい」という主の励ましのことばを聞きたいものです。そしてそれぞれに与えられた場で、与えられた賜物を用いて、与え

られた愛の力で宣べ伝えたいものです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

